

研究ノート 多元的社会におけるアイデンティティ 形成から導き出される市民性のあり方ー中国帰国生 の語りを手がかりにー

著者	大野 順子
雑誌名	教育科学セミナー
巻	41
ページ	29-43
発行年	2010-03
その他のタイトル	The way of citizenship clarified by the formation of identity in multidimensional society- With the talking by the returned Student from China as a clue-
URL	http://hdl.handle.net/10112/4859

多元的社会におけるアイデンティティ形成から 導き出される市民性のあり方

—中国帰国生の語りを手がかりに—

大野 順子

1. はじめに

共通の国民意識、国民国家という枠組みで強く結ばれてきた個人、そして、その個人が生きる社会は、ポストモダン⁽¹⁾に入り、従来の「国民国家」概念の脆弱化に伴い、文化的・政治的多様性が顕在化する時代になった。例えば、人種や民族、ジェンダー、階級、世代、社会的地位、性的指向といった様々な潜在的、多元的要因は、これまで沈黙してきたマイノリティの声を周縁から中央へ移動し、主流文化や主流集団（マジョリティ）中心の社会を脱中心化し、多様性を反映した新しい社会の創造を試みている。

こうした社会の質的变化は、人々の意識や個人を規定しているアイデンティティの変容にも多大な影響を与えている。それはアイデンティティの個人化や断片化、流動化、そして非領土化を促進し、益々人々の帰属意識を低下させ、曖昧にし、不確実にしている。そして、特に1990年代から生じ始めたアイデンティティのゆらぎ（カースルズ／ミラー 1996）は、グローバル化にともなう時間的－空間的圧縮のなかで、これまで固定的で不変とされてきたアイデンティティが暫定的で可変なものである⁽²⁾ことを明白にした。同時に、それは社会のなかで排除され周辺化されてきた人々－社会的マイノリティと称される人々－にとって、主流派に基づく社会構造のなかでアイデンティティのゆら

ぎを日々実感せざるをえない状況にあることをより鮮明にした。こうしたアイデンティティの現状を収束する方向へ導こうと、社会的結束（social cohesion）や統合という概念（Jansen, Chioncel and Dekkers p189）が注目されている。ただし、この場合、アイデンティティの断片化や流動化、非領土化が浸透する社会においてその種の結束や統合をめざすために人々を共通のアイデンティティに従属させようとする、ひとつの価値観や象徴に帰属させることは、社会的マイノリティにとっては脅威と認識されてしまい、社会のなかで疎外感がつるだけになるため、現実的ではなく、望ましいことではないと考えられている⁽³⁾。

本稿の目的は、この個人化、流動化したアイデンティティに従属や帰属ではなく包含・包摂したかたちで共有し、民族やエスニシティ、ジェンダー、セクシュアリティなど多様な規定を有する諸個人のアイデンティティを承認する市民権（斉藤 p60）の実現に向けて、私たちはどのような市民性（citizenship）⁽⁴⁾を涵養すべきか、その一端を明らかにすることである。そのため、ここでは「社会的沈黙者」としての‘中国帰国生の語り’を採用したい。その理由は、近年、日本では中国帰国者数が飛躍的に増加傾向にあること⁽⁵⁾。さらに、彼らは空間的にも明らかな「移動」が伴う中で複数国（中国と日本の二国間）における生活経験を有していること。特に子世代にとっては学校など直接日本社会と

触れあう機会が多く、常に二国間の「間」で揺れ動いている状況がアイデンティティを不安定にさせているからだ。文化的政治的にもグローバル化、多文化・多民族化がすすむ社会において「多様で横断的な差異」(フレイザー p282)を均質化することなく結束していく市民性とはどのようなものか、そのあり方について考察していく。

2. 多元的社会におけるアイデンティティ変容

近代社会において人々の権利やアイデンティティは、国民国家という枠組みに守られてきた。それらは不変であり固定的・静的、私的なものと考えられてきた。齊藤は、権利や個人は主権国家という社会的枠組みに支えられて生み出されてきたと述べている(齊藤 p53)。しかしながら、ポストモダン社会はこうした状況を一変させた。グローバル化の波が、特別な場の限界をはるかに超えた相互依存関係作用の概念を広げ、資本、人、情報などの自由化が国民国家の概念を脱中心化させ、公的生活を統一と多様性のあいだに内在する緊張状態におくようになった(Jansen, Chioncel and Dekkers p193)。こうした状況は文化的な側面では人種やエスニシティ、階級、ジェンダー、セクシュアリティなど個人を規定する基準の複雑さや主体の多元化に見られ、政治経済的な側面では地方分権やNPO活動に見られる脱国民国家化(齊藤 p58)や固定化した生産構造から柔軟な生産様式へというポストフォード主義⁽⁶⁾などにもあらわれている。こうして私たちの文化的、政治経済的両側面を含めた主体は常に新しい何かと関わりをもち、再生していることとなる。ホールはこうした社会環境の中でのアイデンティティについて、それは統一されたものではなく断片化され、交差し合い、たえず変化のプロセスにある

としている(ホール p12)。本稿で注目しているアイデンティティもこうした可変性と不安定さを有し、動的なものであり続ける。

(1) 再帰的アイデンティティ

多文化・多民族社会を迎えた、安定した主体からの脱中心化は、そのアイデンティティを断片化し流動化させた。それはアイデンティティが一時的なものであることを意味している。個人はたえずその位置する社会的コンテクストのなかで理解され、他者や他集団との関わりをなかで意識される。エリクセンは「アイデンティティと社会的状況には密接な関係がある」とし、「アイデンティティは社会が変わるにつれ変化する。それは、いわゆる常識がときに強調するように、個人的で普遍で『内面的』なものではない」(エリクセン p124)としている。前述の齊藤も「アイデンティティとは、主体の置かれた社会的位置や言説的实践を通してたえず解体され再構築されるものである。互いに対立し交差しあう多様な言説のせめぎあいを通してアイデンティティは形成される」(齊藤 p70)と述べている。他の論者も同様にアイデンティティ構築について個人と社会の関係性の重要性を述べている⁽⁷⁾。こうして私たちのアイデンティティは「自己の不断の再定義」(齊藤 p70)を通じて存在しているのである。

なかでも他者との関係性においてアイデンティティを考える上でひとつの中心的なあり方として考えられるのが「再帰的アイデンティティ」である。中西は自己、或いは個人に対して他者や社会の存在の重要性を説き、自己理解は他者理解と不可分に結びついているとし、「個人と社会のスパイラルな循環」により両者の再帰的な前進を述べている(中西 pp.104-105)。そして、自己のアイデンティティを自己モニタリングすることによって自己アイデンティティを自ら再帰的に形成し、自己が変化(内的な再帰性)

すると、社会も変化（外的な再帰性）する（中西 p106）⁽⁸⁾と述べている。この点は可変であるアイデンティティが、ただ単一的に変容するのではなく螺旋的に内部から外部へ向かって変容していることを意味している。こうして、アイデンティティは常に新しく生まれる生産物として発展過程にあるものとして考えられている。

(2) 差異とアイデンティティ

主体の多元化が顕著となったポストモダン社会で考慮されるべき問題の一つに「差異」の問題がある。差異化された社会において、「わたしは一体どこに属しているのか」というアイデンティティの一部である「属性」について考えることが求められる。それは言い換えればエスニシティに関わる問題であろう。多文化的様相を含む現代では、こうした特徴をもったアイデンティティの差異について、それが社会のなかで排除を生んでいるという視点から再考する必要がある。特に、社会的マイノリティとされる人々・集団にとっては、その社会の主流派に対峙して「欠陥 (deficient)」というレッテルを貼られることが多い (Jansen, Chioncel and Dekkers p189)。例えば、移民やエスニックマイノリティなどがそうである。そして、かれらの欠陥は社会のなかで脅威として捉えられてしまう。こうした欠陥を修正しようとするが、こうした場合、単純に差異 (= 欠陥) を尊重しようという姿勢に陥りがちである。マクラレンはそうした場合に「差異の乗り越え」として、『植民地的なテキスト性の内部で理解される』被抑圧者の苦しみに根拠をもつ『乗り越え』として解釈することの重要性を述べている (マクラレン p453)。

ただ、この「差異」についてはこれまで文化的側面ばかりが強調され政治経済的側面が軽視されてきた傾向があった。それは「差異」が個

人内部に基づき、それが外へ出、公に議論されることがあまりなかったからである。例えば、Gouthroは、女性に関わる問題（家事労働など）は女性個人の問題として私的部門へと追いやられ、社会のなかで排除・周辺化されている現状があるとし、そうした価値観を認める社会のあり様を一掃し、女性の貢献や関心なども男性中心社会の中に包摂することの必要性を述べている (Gouthro pp.149-150)。前節の再帰的アイデンティティの部分でも述べたように、個人の変化が社会の変化に相互に影響することを考えれば、かつて私的であると考えられていたものを公的な領域で議論することは何ら不自然なことではないはずである。これは、まさに「国民内部における多様な善や自己アイデンティティに関する承認をめぐる闘争は、避けるべきものではなく、私的な領域に閉じ込めておくべきものでもない」(岡野 p154)ということであり、フレイザーのいう再配分 (redistribution) と承認 (recognition) の政治にある、文化的なものや政治経済的ものを切り離して解決することはできない⁽⁹⁾ということにつながるだろう。「個人的なものは政治的なものである (Personal is political)」ということである。

(3) ディアスポラ・アイデンティティ

エリクセンはスチュアート・ホールの指摘「我われは皆複数の社会的アイデンティティから成り立っている」から、アイデンティティの複雑さや曖昧さの重要性について示唆している (エリクセン p300)。人口移動のグローバル化に伴うアイデンティティの断片化や流動化、非領土化、不確実性や不安定性は、私たち個々人が様々な要因によって規定されていることを明白にした。そうした状況から個人のアイデンティティを表象する概念として注目されているのがディアスポラである。ディアスポラとは強制離散したユダヤ人のことを示す言葉として一般

的に認識されている。コーエンはそれが現在、国外移住者や国外追放者、政治的難民、外国人住人、入移民、民族的人種のマイノリティなどに対して多義的に使用されていると述べている(コーエン p51)。ここではその詳細については割愛するが、大まかに言えば、非領土化された「解放された民族」(コーエン p221) で一つの国民国家という意識を持たない人々(コーエン p242) のことであるといえる。頻繁に象徴的例えとして挙げられるのが移住者(移民)である。かれらは常に母国につながりを感じながらも、それぞれの移住先でアイデンティティにゆらぎを抱きながら生活している。移民2世、3世ともなればなおさらであろう。さらに、人種やエスニシティやジェンダーなど多様性が複雑に絡み合ったアイデンティティは、社会構成的文化⁽¹⁰⁾ のなかではどのような状態なのであろうか。コーエンはこうした人々の特徴について「往々にして、身を守るためにコミュニティという囲いの中に隠れて生きなければならないという思いを生み出し(中略)彼らの懸念が排他的小集団の精神構造をつくりだす。このことを彼らの周囲にいる人々は感じ取り、それが距離感を生み、疑惑、敵意へと発展し(中略)人種差別へとつながる」(コーエン p49) と述べている。そして、かれらのアイデンティティはこうした状況をやりすごすために「故郷への帰属を遠隔の地で保持し続け」ず、「未知の土地で経験する異質なものと混交や変化するものの受容を通して不断に自己を形成し続け」、「差異と矛盾することなく、差異とともに、差異を通じて生きる『アイデンティティ』という概念によって、雑種混交性によって定義され」、「常に自己を新たなものとして、変換と差異を通じて生産／再生産」(斉藤 p69) している。コーエンの言葉を再度借りて表現するならば「ディアスポラは新たに空間を『書き直している』」(コーエン p221) ののである。

こうして、ポストモダン社会におけるアイデンティティは常に不安定さを保ちながらも、日々更新されている。それは絶えず今どこにいるのかという主体の現在位置の確認作業を怠ることを止めないことのようなのである。次章では、その具体的状況の一端を示すために、筆者が聞き手として加わった中国帰国生の語りから見ていくこととしたい。

3. 中国帰国生の語り

筆者は2008年5月20日(火)、非常勤講師として勤務している大学で担当している多文化共生をテーマとした演習において、中国帰国生の学生2名に参加協力してもらい、これまでの人生について語ってもらう機会を得た。参加学生は11名で、帰国生にはそれぞれ渡日から現在までの経験を、特別なテーマを設定することなく自由に語ってもらった。2名のプロフィールは次の通りである。A：経済学部3年生／男／21歳(当時)／1996年来日／中国名使用／祖母が日本人／中国国籍。B：経済学部2年生／男／20歳(当時)／1997年来日／日本名使用／祖父が日本人／日本国籍取得済。現在A、Bの両親は共働きで、日本語使用の必要がない職種に就いている。

帰国生は時として大きな社会に埋没してしまう存在である。例えば、大学内では同じ学生から留学生と同等に理解されている場合が多い⁽¹¹⁾。ここでは帰国生が主流社会(ここでは日本社会)のなかで自己アイデンティティを構築していく様子をかれらの語りから読み解き、前章で述べたアイデンティティの諸相との関連性を見ていくこととする。

(1) 属性に対するゆらぎ

社会的マイノリティのアイデンティティに関わる問題、特にアイデンティティの模索やその

内面的な葛藤の有り様は、主として、日本では在日韓国・朝鮮人二世を中心として1970年代からはじまったことが挙げられる（金 p124）。中国帰国生の場合、重なる部分もあるだろうが、まず、日本社会に新参者のような形で迎え入れられ、明示的に主流社会の洗礼を受けるような場合が多いのではないだろうか。そう考えると、若干状況が異なってくるかもしれない。それは、彼ら自身がその存在やアイデンティティを意識する際も、主流社会のなかで、かれらの属性—エスニシティがどのように扱われているかに大きく影響を受けることとなる。例えば、

B：（日本の学校に通っていた時）日本の先生に「なんでお前は上履き持っていないねん」みたいな、そういう感じとか言われたりとか。あと、異文化違うんで、やっぱり、なんか、みんな、日本人から見下ろされるときもあるんですけど…。(略)あと事故とかあるじゃないですか。あの、警察が来るじゃないですか。もし中国人ってわかったら、やっぱり日本人をちょっとかばうような面倒（筆者注：優遇）をするんですよ。だから中国の人は電車とか、やっぱ環境の場はなるべく中国語を話さないようにしてるんですよ。やっぱり、中国語はなしたらやっぱり、なんか、なんか見方がちがうんですよ。（下線は筆者。以下同じ）

A：なんかこうやって身分を隠すような話っていうか、そういう生活ってなんか送りたいくないっていう気持ちありますし…

日本での生活や慣習はかれらにとって未知の世界であり、かれらの自尊心を大きく傷つける場合も往々にして見られる。自分が何者であるかという属性・エスニシティ（またはエスニック・アイデンティティ）は、「自尊心や個人としての正統性の重要な源泉」（エリクセン

p136）とされている。しかしながら、上記Bのように、それらが文化的、政治経済的に承認されていないと感じるとき、ひとは社会に懐疑的になり、そこへ主体的に関わろうとする行為が消極的になってしまうだろう。Bの「日本社会の中では遠慮がちなが多い」という発言からも、積極的に社会に関わることに自ずとブレーキをかけてしまうことになる。また、Aの発言は直接的に自分たちの属性が日本社会では認められにくいことを象徴している。さらに、文化的側面だけでなく政治経済的な側面においてもかれらは常に主流社会に抑圧されている。

A：僕らの親の世代とかなってきたらね、日本語がまったくわかんないケースが多いと思うんですね。言葉の壁っていうのがあるから就職はもちろんまあしにくい、言葉がわからないからって仕事をしなかったらお金は入ってこないですから僕らも生活できないし、僕らの親はそういうストレスを抱えながら、12年間そうやって苦勞してきて…

A：国籍も中国やったら日本の企業に入ったら賃金も日本人と違うんですよ。

B：たとえばなんか、面接に行ったらもう中国の名前で、中国の国籍やったらもうほとんどいらないんですよ。

自明のことではあるが、帰国生にとって、かれらのエスニシティが主流社会では価値が薄く、「欠陥」として評価されている現状がある。それは政治的、経済的側面にも多大な影響を与えている。こうした現実がかれらの自己アイデンティティの不安定さや曖昧さを、より推し進めているのではなからうか。

次に、帰国生にとっては誰もが経験する国籍選択や名前の選択・使用に関する語りを見ていくことにしよう。

B：あと日本に来たことはやっぱり名前を悩ましました。名前変えるか、変えないか。それは、家族はすごく悩んでたんですけど。ま、中国の名前にしたらなんか日本の学校にいったらやっぱり、なんで違う名前なんやとか思われるんすけど。でも日本の名前に変えたらなんかそれもまた違和感あるんすよ。

A：(中国国籍を)選んだっていうかね、ぼくはいずれ(日本国籍を)取るんですけどね、今はなんか面倒くさいって言うか(取りに)行ってないだけなんですよね。ま、いずれとらないといけない。日本に住む気なんで、だからとらないと、もうしゃあない。

B：なんで中国で生きて、なんでいちいち日本に来て、そのなんかこっちで生活せなあかんのかなとか、たまーに思うこともあるんですけども、やっぱり、なんていうんですかね、ま、こういう運命で、こういう家族に、そういうふうになってしまったから、もうこういう生活をしていかないとだめなんかなって

この問題は、まさしく「自己」に関わる問題である。それは過去の自分、現在の自分、そして将来の自分にも大きく影響することだ。かれらの語りからは、常に社会的に抑圧されている状況ではあるが、属性としてもっているかれらの(中国人としての)エスニシティを捨てることはそう簡単なことではないことが読み取れる。しかしながら、現実的に属性としてのアイデンティティにしがみついても移住先の社会(日本社会)では生きにくさを軽減させることすら困難である。Aの「もうしゃあない」やBの「こういう生活をしていかないとだめなんかな」の語りからは、虚無感や、マイノリティが主流社会に対し、自己を主張し、異議申し立てすらできない現状を露わにしている。つまり、こうした状況も、かれらをさらに脆弱な存在へ追いやり、自己の属性やアイデンティティ

に対する不信感を募らせている。

ただ、国籍や名前に関しては「選択できる」余地が残されているが、現実には、

A：国籍選ぶのってけっこうなんか、日本国籍選んだら、ああ中国裏切ったみたいな感じで、なんかそういう考えもありますし。正直選びにくい。

B：やっぱ外国の国籍持ったら公務員とかないとかあるんですよ。やっぱり。国籍だけでやっぱり範囲、活動範囲が狭くなっちゃうんですけど。

A：選べる、なんやろ、選べる権利ってけっこうややこしいんです。(所属はどこか)選びたくない。結構、あの、祖国っていう、どっちが、どっちがぼくらの国なんかっていう、両方もっていたらなんか頭がパンクしそうな感じで…

といったように、決して「選択できる」ことが「良い」ことを意味していない。なぜなら、選択できることがプラスに作用するのは文化的、政治経済的すべての面において尊重されている集団—社会の主流派側にとってのみであろう。さらに、Aの語りにもあるように、彼らにとって日本国籍を選ぶことは、換言すれば、中国国籍を捨て日本人になることを選択したことを意味する。果たして、彼らにとって一方のエスニシティを完全に放棄することは可能なのか。この問題は中国帰国生のみならず、他のエスニックマイノリティにとっても同様であろう⁽¹²⁾。岡野は「社会的にマイノリティであることを強制されてきた彼女たち/かれらにとって『選択の自由』の尊重は、自己の尊厳への承認につながるどころか、抑圧的な状況を維持するだけでなく、そうした状況にいつそのの負荷がかかる事態を招来する危険がある」(岡野 p152-153)と述べている。選択をマイノリティ自身に委ねることは聞こえはいいが、それはかえってかれ

らのもつ差異やアイデンティティの内容を社会的に、政治経済的に十分に吟味していないことにはならないだろう。

主流社会において、帰国生はたえず自己のアイデンティティに対して不信感や不確実性、不安定性や曖昧性を抱えた状態にある。そして、このような「どっちつかず」の浮遊したアイデンティティは、常に大きな社会に対抗・対峙したかたちで存在することを余儀なくされている。

(2) 「どちらでもない」し「どちらでもある」存在

こうした曖昧なアイデンティティに対して、エリクセンは中国帰国生のような「どっちつかず」の人びとに対し、「変則的存在」¹³⁾としてのあり方を示している。換言すれば、状況に応じてアイデンティティを使い分けることが可能であるということだ。確かに、これは現実的でありえることだ。特に、自己の存在を正統化しようとする意識が働く際、アイデンティティの使い分けをすることが生じる。

B: でもなかにはなんか、中国から日本に来て、で、中国を認めないっていう人もおるみたいです。日本で暮らすために。もう、一生、自分の中国の身分を隠し続けるみたいなのもおりますね。高校のときに、一人の友達が、ぼく知らなかったんですよ。中国人ってのが、日本語で普通にしゃべるから。で日本語の名前使ってるんです。でも、よう話し聞いたら中国人やったんですよ。昔いじめられて、中国の名前使っていじめられて、もう、なんで日本に来て、知らんところに来て、来さされて、いじめられなあかんの、みたいな。じゃあ、日本の名前ですつといこうかみたいな感じで。

上記コメントは直接Bに関することではない

が、同じ帰国生のなかでは、都合が悪くなる—自己が不安定になると自分を演じることによりその場をやりすごすことがあることを示している。また、2007年末から2008年にかけて社会問題となった中国冷凍餃子問題についても、帰国生自身にとっては自己のアイデンティティを否定されるような出来事であったため、次のようにコメントしている。

A: 餃子問題とかもそういうの見たら、正直見たくないですよ。ある意味、なんか(自分とはもう)関係ないみたいな。

自分にとって不利な場面が生じると、負荷の少ないアイデンティティへの切り替えをしようと試みる傾向があるようだ。

しかしながら、筆者が対話した帰国生2名については、総体的に「変則的」という特徴が顕著ではなかった。それよりもむしろ、現状を見据えながら「移住先の社会においていかに自身のもつ差異を尊重・評価されながら存在できるか」ということを追求したいという思いが強いように感じた。例えば、2005年反日デモが起こった際にも、

A: (中国と日本のあいだの諸問題について) 気にしますね。両国の関係、日本と中国の関係っていうのは気にするんですよ。ぼくらにとって一番仲悪かったら居心地悪いじゃないですか。で仲良かったらいいじゃないですか。だから反日デモがあったとき一番どうしようって感じで。あの、何年前ですかね、2006年(筆者注:2005年)ですかね。あの反日デモ、中国の。あのときでもね、ぼくらがたぶん一番つらいです。どっちの立場にたつていいかまったくわかんない。もしほんまに戦争とかもう一回起こしたらぼくらってたぶん一番つらいです。何を、どっちかばうのかも、もう選ぶ、選ぶに選べな

いです。

どちらか一方の側に立とうとするのではなく、中国と日本、二つの視点から反日デモについて考えている。それは、かれらが両国にルーツをもつことで、アイデンティティの重層部分から二つの文化を繋ごうとする意識とも読み取れないか。エリクセンは先ほどの変則的存在に対し、「どっちつかず」の人々のことを、実はかれらの曖昧性を長所へと転換させる事業家あるいは文化仲介者としてとらえることが妥当であると述べている（エリクセン p131）。同じように、コーエンも「特殊のものと普遍的なものとの間の架け橋となるのに適した位置にい」（コーエン p270）る存在とするコーディネーター的要素を兼ね備えたひととして、アイデンティティの曖昧性をもつ人々の散在を支持している。自己アイデンティティ内に複数性を保障することは帰国生のような存在にとっては重要なこととなろう。

(3) ディアスポラで再帰的な存在へ

では、かれらのアイデンティティとは一体どのような性質のものなのであろうか。

B：たまーになんか、サッカーするじゃないですか。で、中国と日本やったらどっち応援するねん、とつかよう聞かれるんですけど。なかなか答えにくいです。答えにくいんですけど、ま、どっちでもいいやんって思うんですけどね。

A：ほくらってほんま結構一番つらい立場ですよ。あの、日本におったら中国人って思われるし、中国に帰ったら、あ、日本の、日本から帰ってきてると、向こうの人からも差別受けるし、こっちからも差別受けるんですよ。

A：愛国心強いのは中国なんですよ、愛国心強いのは。正直ほくはまったくないですね、且

本も好きじゃないし、中国も好きじゃない。

B：両方悪い面も見たっていうか、なんか知ってるからどちらもいえない。

日本社会で排除され、文化的、政治経済的に規定されている様々な枠組みから疎外されているかれらにとって、異種性、または雑種性を承認されることはかれら自身のアイデンティティを承認されることにつながるだろう。ポストモダン社会において個人のアイデンティティは断片化され、流動的で、非領土化し、曖昧性をもつものであることは既に述べた。かれらのように明確な属性をもたず、両国の間を浮遊して定まらない根無し草、または水草のような存在は、あまり固定化されたアイデンティティは相応しくない。どちらか一方に偏向するといったことがなく、不断の自己追求しつづける—それが自己の内部からも要求されているように—ディアスポラ的な資質があるのではないだろうか。さらに、

B：あの…選挙あるじゃないですか。選挙は外国人こうできないのは今なってるじゃないですか。だから、それもなんかすごくよくわかんないです。同じように税金も払ってるし、で、おなじように生活もしてるのに、こう選挙だけは選べないのか…

A：ほくは中国の国籍なんです。税金は確かに払ってるんですよ。国民年金も来るし、通知が。でも、選挙は、あの紙は来ないです。結構いろいろ矛盾がありますね。

ここには、かれらが主流社会のなかでの日々感じている矛盾を通して、主流社会との関係性を再構築しようとする意識が読み取れる。存在の曖昧性があるからこそ、そこには可変性があり、社会を変えていく交渉力が備わっている。中西は「非西欧のカルチュラルアイデンティティ

イとの遭遇によってヨーロッパ人が自らに出会う可能性を与えられ」たことから「非ヨーロッパの多様なカルチュラルアイデンティティとの遭遇が、閉塞しつつあるヨーロッパ人に風穴を開ける可能性を指摘している」(中西 p116)と述べている。これはマイノリティとしての視点から対抗する社会(主流社会)を再帰的に前進させることが可能であることを示唆している。中西の言葉を借りて言うならば、非ジャパニーズである帰国生を含めた外国人住人の存在は日本社会にとって有益な存在となるのではないだろうか。

A: けっこう近所やったら多文化共生社会になってると思うんですよ。家の近所で。結構たまに、ぼく餃子とか作ってあげてるんですよ。正直そういう機会になったら、めっちゃたぶん健全な社会だなあって思うんです。だから、こういう多文化共生社会になるには、愛国心、こんなこといいんかなあ、愛国心捨てる(国という所属を捨てる・どこにも帰属しない)っていう…

かつてのような国民国家という枠組み内で安定していたアイデンティティはもはや信頼できるものではないかもしれない。次章では、この中国帰国生の語りを踏まえ、多様で曖昧なアイデンティティを一つ一つ承認し、包摂していく市民性のあり方を考察していこう。

4. 多元的社会における市民性

国民国家概念の解体をもたらしたグローバル化は、超国家的で多様なアイデンティティの承認をもとめる市民性の構築を要求している。それは、民族、エスニシティ、ジェンダー、セクシュアリティなどの均質でない多様な規定を有する諸個人のアイデンティティが浮上し、それ

ら状況に依拠したアイデンティティを承認する市民権が求められるようになったこと(フレイザー p60)や、複合的な集団(複合的とは性、人種、文化、環境をめぐるもの、セクシュアリティ、ジェンダー、エスニシティ、階級など)のアイデンティティの承認をめぐる市民権の闘争が激化していること(斉藤 p68)からも想像がつくだろう。いかにして個人化、断片化したアイデンティティを束ねていくのか、社会的結束や統合という観点からも、その内容(質)のあり方が問われている。なぜなら、これまでのシティズンシップ(市民性)は国家の構成員一人一人に帰属意識を育てていくものとして理解され、そこに含まれている排他的/強制的側面を見落としてきた(岡野 p60-61)傾向があったからだ。中国帰国生の場合もそうであるように、例えば、国民としての強いアイデンティティの共有を基礎にした概念を構築するならば、必ず支配社会のなかでの権力作用により主流派に共有された意識をマイノリティに強制する危険性をはらみ、主流から外れた集団やグループは市民権を奪われた状態に置かれる危険性があるからだ。それは、私たちが既に克服されたはずの「帰属意識」に基づいていた近代へ引き戻すことになりかねない。また、主体の多元化に対するバックラッシュとしての懐古的な国民国家主義的保守化傾向が復活しつつあることも注意しなければならない。

しかしながら、現代のような差異化されたアイデンティティや国民性に基づかない「複数性と個別独立性」(岡野 p74)が主張する多元的社会においては、こうした概念や傾向はそぐわないし、フレイザーが述べているように、文化帝国主義にあるような差異を逸脱したものとみなす今日の支配的な考え方に代わって、人間の多様性⁽¹⁴⁾が肯定的に理解されること(フレイザー p279)こそが重要になってくるだろう。私たちはそれぞれ異なる価値観や異質で多様な

アイデンティティを保持している存在である。現代社会では、こうした差異全般に対して単に寛容であるだけでなく、それらを積極的に取り込み（包摂し）、承認し、尊重していく必要があるだろう。

(1) 全体性に基づいたディアスポラな市民性

こうした議論から、多元的社会における社会的結束や統合、アイデンティティの包摂を可能にする市民性のある一定の枠組みを導き出すことが可能になるだろう。齊藤は断片化した市民権は社会的結束や連帯を衰退させるとし、断片化した個人や市民権の寄せ集めであるラディカル市民権をどのように再組織して多元化するか、つまり多様な集団の権利を相互承認する節合の、つまり多元主義的な集団的アイデンティティを承認するラディカル市民権構築の重要性を説いている（齊藤 p65-p72）。帰国生自身が「どっちつかず」の存在であったように、個人化した多様なアイデンティティはそれぞれ異質でありながら同質でない一時的なものであり、矛盾しあっている。しかし、その状態を無視することは単に社会に、そして該当する個人に混乱を残すだけである。マクラレンは全体性（totality）という観点から、その拒絶は現実の様々な問題や諸関係を曖昧に、不明瞭にしがちであるとし、「民主主義社会の共有された展望（偶発的で一時的だが）がなければ、差異の政治学が分離主義の新たな形態に陥るような闘争を支持する危険をおかすことになる」（マクラレン p447）と述べている。そこで重要になってくるのが不安定で多様な差異の重なりを内在した全体性概念⁽¹⁵⁾である。多元的社会におけるアイデンティティや市民性は所与のものというよりも、より強い可塑性があり意識的に創造し、修正することは可能である（キムリッカ p276）ゆえに重層的である。よって、この全体性概念はアイデンティティや市民性を考える

とき重要なキー概念になると考えられる。フレイザーも「アイデンティティを構築された関係性としてではなく、与えられた肯定性として扱い、実体化し」た結果、「文化をバルカン化⁽¹⁶⁾させ、集団を相互にばらばらにし、それらが重なり合うものであることを無視し、互いに横断しあう相互関係とアイデンティフィケーションを」やめてしまう、と文化やアイデンティティの重層性に着目することの必要性について言及している（フレイザー p280）。一般的に多文化社会において多様な主体間での社会的結束は難しく、調和しにくいと考えられがちであるが、それは内在する重層性への視点の欠落が原因であると考えられる。これは前述したように単に差異に対して寛容であるだけでは十分ではないこととも関係する。そこで全体性概念について述べたマクラレンは「連帯の政治学」（マクラレン p456）の創造を提案している。この場合の連帯とは、固定的で堅固なものではなく、きわめて緩く、対立や不確実性をも認めるものとしている。それは互いの関係を均質にするのではなく、相互に作用しあい、新しいものを生み出すような多人種的連帯のことである。それぞれの多様なアイデンティティを承認しあい、複眼的な思考力や視点を保ちながら、それら雑多なアイデンティティがたえず交差し合い、能動的に社会に関わることを通して、Jansenらのいう「多様なコミュニティに所属する感覚」（Jansen, Chioncel and Dekkers p196）を味わうことが多元的社会における個人であり、市民性はこうしたディアスポラの性質を奨励する。

それにはまず、主流派によって階層化され、支配されているホスト社会の変容が要求されよう。なかでも主流派の存在（文化）を脱構築することは重要である。マクラレンが白人性について「白人のエスニシティを無視することは、白人のヘゲモニーを強めることである」（マクラレン p457）と指摘しているように、主流側

の文化は本質的なものではなく社会的に構築され再生されているということ。かれらの文化的規範は中立的で普遍的でないことを理解することが重要である。これは前章の中国帰国生の語りからも、かれらが常に主流文化の下位に置かれ、合わせることを必然とされている状態であることから明らかである。そして、さらに様々な差異や社会的格差を不遇なものとして認識するのではなく、そういった格差を是正するために財を再配分すること（岡野 p73）や、差異を社会的に活かしていけるような制度を構築していくことが求められているのである。これらの点は、次の再帰的市民性や市民性に関わる公的・私的領域の内容に関係してくるだろう。

(2) 対話に基づく再帰的市民性

Gouthro は、成人教育の領域で重要な市民性について次の4点をあげている。1点目は包括的市民性 (inclusive citizenship)、2点目は多元的市民性 (pluralistic citizenship)、3点目は再帰的市民性 (reflexive citizenship)、そして4点目は能動的市民性 (active citizenship) である (Gouthro p148)。ここでは特に3点目にあげられている批判的に社会に関与することを求められている「再帰的市民性」について取り上げる。主に社会的マイノリティは定住している社会のなかで、不安定な状況の中にいるからこそ、その社会に何が欠けているのかをすぐに見抜くことが出来る (コーエン p271) 存在である。それは文化的のみならず法制度などの政治経済的な領域に関する事柄まで含まれる。前述の帰国生の語りにおいても、「仕事もなかなか見つからないし、でも、日本政府からぜんぜんそういう保護とかもない…(1世に関して) 中国から日本に来てその老人とかは年金もらえないんですよ。」(B) や職場における賃金差、選挙権の問題など、主流側の日本人にとっては何ら問題ではないことが、マイノリティ側の感

覚では社会的矛盾と理解される場合がある。こうしたホスト社会の差別主義、不寛容さ、排除の政治学などからくる「異質な現代社会の多様に雑種化された経験」の否定 (マクラレン p459-460) は、マイノリティ側が受け入れ社会で感じる違和感を増大させる。しかしここで重要なのは、こうしたマイノリティが主流社会で直面する違和感や矛盾を越えようとするのであり、それをもとに社会構造や個人をスパイラルに上昇させようとする意識である。互いの差異を超え、他者と出会い、他者の視点を学ぶことは自らの偏見や先入観を自省し、新しい自分自身 (または社会) を創造すること (岡野 p118) である。これが再帰的市民性の意味するところであり、現代にとって重要な市民性のひとつなのである。

それでは、そのような市民性を支えるものは何であろうか。それが「対話」、或いは「討議的民主主義 (deliberative democracy)」とよばれるものである。キムリッカは現代社会を「社会をより『討議民主主義 (deliberative democracy)』的な体制へと変えていく」(キムリッカ p210) 必要性があると説いている。差異化された社会の人々は常に自らのアイデンティティを承認してもらうために競合しあう特徴 (マクラレン p441) をもっている。そのため社会的合意を得るためにはこの討議的民主主義が重要な手がかりとなる。

A : こういう (自分たちの) 話をこうやって、少人数で、まあ、しゃべったら、まあ、多少、いや多少は理解できるじゃないですか。こういう話を日本国全員に、もししゃべれたら、ちょっと変わるかなと思うんですけどね。

市民権とはそれぞれの差異を乗り越え、全市民の共通善について考えるための討論の場となるべき (キムリッカ p262) であり、対話を交

わす国民たちが「諸個人からなる社会を創造」し、対話こそがリベラルな政治文化を構築する(岡野 p83-84)。

(3) 市民性に関わる公的・私的領域

最後に、こうして社会的マイノリティ、または沈黙者である個々人の声を積極的に採用し、差異が引き起こす諸問題を政治化しながら社会を再帰的に更新するということが意味することは何であろうか。それは差異を含めた文化的で個人的なもの(=私的なもの)と社会的・政治経済的な問題(=公的なもの)が結合した関係にあるということだ。フレイザーはこれまでのアイデンティティに関わる問題点として、文化的ポリティクスと社会的ポリティクスのあいだの問題を繋げることができていない(フレイザー p264)点をあげている。さらに言えば、現在の多元主義的な多文化主義は政治的な問いを回避している(フレイザー p281)と指摘している。しかしながら、私たち個々人に関わる問題は、明らかに社会(政治、経済領域)と何らかの繋がりをもっている。市民性のあり方も、まず、この私的・公的の関係性を互いに相関したものであると再認識し、文化(=私的なもの)と政治経済(=公的なもの)を同時に変革すべく、社会的な要求と文化的な要求を統合することが可能な市民性の構築を目指すべきであろう。

5. おわりに

以上、本稿は、ポストモダン社会における多様化したアイデンティティを包摂し、承認する市民性のあり方について考えてきた。3では中国帰国生2名の語りを参考に、現実社会での個人化、断片化したアイデンティティの実際を、ほんの一部分ではあるが見てきた。もちろん、彼らの語りは決して中国帰国生全体を代表する

ものではないし、その典型でもない。しかしながら、彼らの語りを援用することによって、多元的社会における市民性のあり方の一端ぐらいは示せたのではないだろうか。

以上、本稿から市民性に関する次の3つの視点が明らかになった。

1点目は、市民性におけるディアスポラ性の承認である。多様性に富み、曖昧性を含んだアイデンティティはつねに浮遊している。こうした状態をポジティブに受けとめる必要がある。ほどよく緩やかな共同体・連帯意識のもと、価値観の多元性に基づいた、自由に結束可能な異種混交性(hybridity)を認めることのできる社会(公共圏)こそが現代の市民性にとって不可欠であろう。

2点目は、他者の視点から社会を再帰的に発展させていく市民性である。ここでいう「他者」とは主に社会的マイノリティとされる人々のことをさす。かれらの経験する矛盾点を公共の舞台へ上げることが重要なのである。そのために対話や討議を促進することが求められるだろう。討議的民主主義を発展させることにより、すべての人々がすべての問題に責任があるという実感を持つことを可能にする。

3点目は、アイデンティティに関わる問題を反本質主義の視点から捉え直し、私的なものと公的なものとを繋ぐ市民性の構築である。この点が、形式的平等ではない真に平等で公正な社会への再構築に貢献することになるだろう。単に多様なアイデンティティを認めただけではマイノリティに対する差別や不平等などの現実的な問題解決には至らない。常に全体性という視点を持ち、こうした問題の実践的解決に消極的にならないことが重要である。

最後に、2点だけ指摘しておきたい。一つは「その社会で権力を操作・操縦しているのは誰か」を明らかにすることである。現代は多文化共生社会といわれて久しいが、未だ見せかけの

社会的調和の枠から抜け出せていない状況が急増している。こうしたなか、誰に権力が集中しているのか。この問題は討議的民主主義の発展にも影響することでもあるから、今後、より精微に考察していく必要があるだろう。本稿で扱った中国帰国生は、日本に暮らす中国籍の人々の中で比較的恵まれた社会的存在である。二つ目は、学校教育の範疇だけでなく、より包括的な生涯教育のなかでの「市民（性）教育（citizenship education）」の開発に努めることである。多元的社会に必要な市民性を育成するため、どのような内容にもとづいたプログラムを計画・実施すべきか。そのニーズはこれから益々高まっていくだろう。この点についても本稿では十分に言及できなかつたため、今後の研究課題としたい。

注釈

- (1) リオタールは、これまでの「大きなナラティブ（物語）」にゆだねられていた近代（モダン）から、今はその「大きなナラティブ」に対して懐疑的になっているという状況を考慮し、現代のことを「ポストモダン」と呼んでいる。このポストモダン社会では近代に存在していた明白なものが分散し、人々は多様な交差の中で生きている。こうした点が筆者の述べたいことと関係しているため、本稿では「ポストモダン」という表現を使用している。また、ポストモダンとは近代と完全に時期的に分岐しているわけではないが、近代を相対化するという意味からも「ポストモダン」という言葉を使用することとする。
- (2) バウマンは、社会的枠組みが液状化した現在は、「固定的」から「液体的」モダニティの段階へ変化し、人々にとってきっちり固定され堅固に構築されたアイデンティティは重荷で強制的であり、アイデンティティに一貫性を持たせることは有益な選択ではないとしている。つまり、アイデンティティの脆弱さ、一時性はもはや疑いようがないことであると述べている。
- (3) 例えば、エリクセンはヨーロッパ人のアイデンティティについて「ひとつの価値観や象徴へ帰属させることは現実的な行為ではない」（エリクセン p150）と指摘。キムリッカも共通のアイデンティティへの従属は、マイノリティの存在を脅かす（キムリッカ p277）と警告している。
- (4) ‘citizenship’ の意味は多義的である。最近では権利の問題と絡めて「市民権」として論じられる傾向がある。他方、社会を構成する一員として必要な資質を有するという意味で「市民性」とも訳されている。本稿では両側面の解釈を包含した ‘citizenship’ を想定しており、特に、誰もが社会生活を送る上で、よりよく生きるために求められる能力や態度、価値観などの総体として ‘citizenship’ を捉えているため、基本的に ‘市民性’ と表記する。
- (5) 入国管理局の統計では国籍別外国人登録者数の割合が2008年12月末で中国出身者が全体の約3割でトップとなる。以前は韓国・朝鮮籍の割合がトップで次いで中国であったが2007年度を境に逆転した。理由としては在日韓国・朝鮮籍の渡日者が増えていないことと、日本国籍者との結婚が影響していると思われるが、それらを考慮しても確実に中国出身者の増加傾向は顕著である。
- (6) 1980年代、企業はモノを生産し、販売するためだけの組織から、価値ある情報を生み出し、それを効率よく伝達し処理するための組織への転換を迫られた。これにより、それまで標準化されていた大量生産構造が衰退し、よりオープンで柔軟になった工業

生産のことをポストフォーディズム（ポストフォード主義）と呼んだ（参照：平田／ライアン）。

- (7) 例えば、マクラレンは「社会の再生と自我の再創出は、無関係なもの、あるいは多少の関係しかないものとは見なせない。それらは、相互に刺激しあい構築しあう過程なのである。」（マクラレン p452）と述べている。
- (8) 両者の再帰的關係は必ずしも成立しないかもしれないが、自己（ミクロ）と社会（マクロ）の關係性はたえず相互作用しながら再創出されている。注釈（7）も参照。
- (9) フレイザーは「承認における不平等は、配分における不平等と重なり合うものであり、配分における不平等と切り離して論じることがまったく不可能である。（中略）それは文化的ポリティクスを、社会的なポリティクスとの關係において捉え直し、承認の要求と、再配分の要求を繋げていくことを意味する。」（フレイザー p263）と、両者を切り離れた議論は不毛であると述べている。
- (10) キムリッカは「公的領域と私的領域の双方を包含する人間の活動のすべての範囲－そこには、社会生活、教育、宗教、余暇、経済生活が含まれる－にわたって、諸々の有意義な生き方をその成員に提供する文化」として社会構成的文化を定義し、それは「それぞれが一定の地域にまとまって存在する傾向があり、そして共有された言語に基づく傾向がある」（キムリッカ p113）としている。
- (11) B「あの、僕らの存在って、あんまり知らないと思うんですね。あの、結構留学生、留学生って勘違いされるんですね、」（2008年5月20日）より。
- (12) 例えば、清水はベトナムにルーツを持つ

子どもたちとのインタビューから、彼らが日本人化することに対して、同じ境遇の仲間から嘲笑されることに対して不快感を抱くことや、近親が日本人化することに対して焦燥感を抱くことを明らかにしている（pp165-166）。

- (13) エリクセンは移民二世、三世世代においては、状況に応じてアイデンティティを切り替える特徴があると指摘している（エリクセン p259）。
- (14) 但し、差異を無批判に称揚することは好ましいことではなく、その内実を見据えることも重要であるとフレイザーは述べている（フレイザー pp279-280）。
- (15) マクラレンはこの場合の「全体（性）」は「普遍（性）」を意味するものではないとしている（マクラレン p447）。
- (16) バルカン化（balkanize: バルカナイズ）とは国・領土、グループ等を分派に分裂させるという意味がある（小学館ランダムハウス英和大辞典参考）。ここでは（文化の）「孤立」や「分裂」状態のことを意味する。

引用・参考文献

- Gouthro, P. A., Active and inclusive citizenship for women: democratic considerations for fostering lifelong learning (2007) International Journal of Lifelong Education, Vol.26, No.2, pp.143-154
- Jansen, Th./Chioncel, N./Dekkers, H., Social cohesion and integration: learning active citizenship (2006) British Journal of Sociology of Education, Vol.27, No.2, pp.189-205 Routledge
- Lyotard, J. F. The Postmodern Condition: a report on knowledge/Jean—François Lyotard ; translation from the French by Geoff

- Bennington and Brian Massumi ; foreword by Fredric Jameson Eleventh printing (1997) University of Minnesota Press (Theory and History of Literature; vol. 10)
- バウマン、Z.、森田典正訳『リキッド・モダニティ』(2001) 大月書店
- バウマン、Z.、伊藤茂訳『アイデンティティ』(2007) 日本経済評論社
- カースルズ、S./ミラー、M. J.、関根政美他訳『国際移民の時代』(1996) 名古屋大学出版会
- コーエン、R.、駒井洋監訳『グローバル・ディアスポラ』(2001) 明石書店
- エリクセン、T.H.、鈴木清史訳『エスニシティとナショナリズム—人類学的視点から』(2006) 明石書店
- フレイザー、N.、仲正昌樹監訳『中断された正義—「ポスト社会主義的」条件をめぐる批判的省察』(2003) お茶の水書房
- ホール、S. /ドゥー・ゲイ、P.編、宇波彰監訳・解説『カルチュラル・アイデンティティの諸問題』(2001) 大村書店
- 平田清明『市民社会とレギュレーション』(1993) 岩波書店
- 法務省入国管理局 報道発表資料「平成20年末現在における外国人登録者統計について」
<http://www.moj.go.jp/PRESS/090710-1/090710-3.pdf> (検索日：2010年2月2日)
- 飯笹佐代子『シティズンシップと多文化国家—オーストラリアから読み解く』(2007) 日本経済評論社
- 金泰泳『アイデンティティ・ポリティクスを超えて—在日朝鮮人のエスニシティ』(1999) 世界思想社
- キムリッカ、W.、角田猛之他監訳『多文化時代の市民権—マイノリティの権利と自由主義』(1998) 晃洋書房
- ライアン、D.、合庭惇訳『ポストモダニティ』(1996) せりか書房
- マクラレン、P.、「多文化主義とポストモダン批評—抵抗と変革の教育学をめざして—」A.H.ハルゼー他編、住田正樹他編訳『教育社会学—第三のソリューション—』(2005) 九州大学出版会
- 松尾知明『アメリカ多文化教育の再構築—文化多元主義から多文化主義へ』(2007) 明石書店
- 中西真知子「再帰性とアイデンティティの観点からの近代化論—ギデンズの再帰的近代化の時間的空間的広がりをめぐる—」『ソシオロジ』第47巻第3号 (2003) 社会学研究会
- 岡野八代『シティズンシップの政治学』(2003) 現代書館
- 齊藤日出治『空間批判と対抗社会—グローバル時代の歴史認識』(2003) 現代企画室
- 清水睦美『ニューカマーの子どもたち—学校と家族の間の日常世界』(2006) 勁草書房
- 碓井崧他編『社会学の理論』(2000) 有斐閣